エベネザー・ハウードの田園都市論とオープンスペースの位置づけ

Garden City Theory of Ebenezer Howard and His Vision on Open Space

村上 暁信*

Akinobu MURAKAMI

摘要：エベネザー・ハウード（1850－1928）は、1898年に『Tomorrow: A Peaceful Path to Real Reform』を著した。その中で田園都市という新しい都市の建設を提案し、その後の都市計画に多大な影響を与えた。ハウードは著書の中ではオープンスペースの重要性をうたっているが、実際の建設に際してはほとんど言及していない。田園都市論の形成過程を検討することにより、彼の関心はむしろ人間の技術の統合である都市建設という行為により多くの労苦が取り除かれることと、協同の原則に基づいた社会をつくりあげることにあったということが考察された。

1. はじめに

1898年にエベネザー・ハウードによって著わされた、『Tomorrow: A Peaceful Path to Real Reform』（1902年に『Garden Cities of To-Morrow』「明日の田園都市」と改題されて再版）は、これまで現代都市計画運動を指導し、その目標を定める上で非常に大きな働きをしてきた¹⁾とされている。しかしその一方で、この本が真に理解されることは少なかったともいわれている。²⁾

18世紀にイギリスで起こった産業革命はその後急速に広まり、社会生活の様々な面で重要な問題を派生させた。特に農村から都市への人口流入とそれに伴う都市における住環境の劣悪化は深刻な問題であり、田園都市論もこれらの問題解決のための方策のひとつであるとハウードは位置づけている。³⁾

ハウードは都市、農村、そして新たな形態である都市農村（田園都市）のそれぞれの特徴をダイアグラム（図－1）に示して、都市と農村のどちらの不利面からも解放された田園都市の建設を提案した。

田園都市の姿はダイアグラムで示されている（図－2，3）。その大きさは約6,000エーカーであり、中央部の1,000エーカーが市街地として計画されている。中心から6本のブルヴァールが放射状に出て市街地を6等分し、中央には大公園が設置され、さらにその中心には公共建築物が配置されている。市街地の外周には鉄道が環状に走り、その外側は製造工場、病院、学校等の敷地と農業用地とされ、人口は市街地30,000人、農業用地2,000人の合計32,000人とされている。

ハウードは、田園都市においては人々が快適に生活できるように、都市部の中心にも公園、庭園、果樹園、森などを設置する⁴⁾としている。また田園都市建設に際しては、建物を計画するよりも先に、十分な大きさの公園や幅の広い道路等のオープンスペースを第一に確保する必要がある⁵⁾と述べている。このことからハウードは田園都市建設に際して、オープンスペースの設置ということを非常に重視していたと考えられるが、著書以外ではオープンスペースに関する記述は非常に少ない。

本論においては、田園都市論形成の過程等を検討することによりハウードの考えた田園都市とはどのようなものであったか、そしてそこではオープンスペースはどのように位置づけられていたかを考察することを目的とする。

オープンスペースについては、農業地帯とは常に別個に記述されていることから、ハウードがオープンスペースという際には農業地帯は含まれず、都市部に設置されるものに限られていたと考えられる。

図－1 エベネザー・ハウードのダイアグラムNo.1
(出所：文献 31))

ハウードは都市部において、公園や庭園、果樹園、森(woods)を設置する⁴⁾としている。またロンドンにあるスラムは将来、公園、レクリエーション地、アロットメント・ガーデン(allotment gardens)に変わるであろう⁶⁾としている。従ってこれらはオープンスペースに含まれると考えられる。

また著書の中で、公園空間の内40エーカーはロード・オーナメンテーション(road ornamentation)である⁷⁾としている。同じ著書で、田園都市においてはブルヴァールやグランドアヴェニュー等の道路の設置も提案されている。このことから道路もオープンスペースに含まれると考えられる。

以上のことから本稿においては、ハウードの言うオープンスペースとは、都市部に設置されるものであり、公園、庭園、果樹園、

*東京大学大学院農学生命科学研究科

森やレクリエーション地、アロットメントガーデン、道路等であったと仮定し、考察を進める。

2. 田園都市論の形成過程

エベネザー・ハワードは1850年にロンドンのフォア街に生まれた。父親は小さな小売商を営んでおり、生活に経済的問題はなかった。早い時期に親元を離れて学校の寮に入り、15歳のときには店員として働き始めている。その後21歳までは、職を数回

図-2 エベネザー・ハワードのダイアグラムNo 2
(出所：文献 31))

変えながらロンドンで生活している。

1871年、21歳のときにハワードは友人2人とともに、アメリカで土地を開墾するというある種の野心をもって、⁸⁾ アメリカに渡りネブラスカ州で土地を得て農業を始めたが、これは失敗に終わっている。このときの失敗について後にハワードは、「協同というものが欠けていたために、時間と労力の多大な浪費に終わってしまった。」⁹⁾と述べている。

農業をやめた後、ハワードはシカゴに行き再び事務の職に就いている。シカゴでの生活については次のように述べている。「シカゴでの生活は私に多大な影響を与えた。ここで信仰や社会問題に対する私なりの考え方の大枠が形作られた。」¹⁰⁾

1876年にイギリスにもどったハワードはシカゴで持った社会問題に対する意識をさらに深めていき、1880年頃までには新都市建設のおおまかな構想を完成させていた。¹¹⁾ その後、計画をより現実的なものにするために、労働委員会の書記の仕事に就き様々な経済問題を研究し、いかにして新都市建設を経済的に成功させるかについて研究している。¹²⁾

1888年にハワードはエドワード・ベラミーの「顧みれば」を読み、そのときの印象を次のように述べている。「その本（「顧みれば」）を読んだ翌朝、私は個人的な利益を無視した、コミュニティへの奉仕という考えの上に成り立つ新たな文明社会の誕生の可能性を実感した。そしてそのような社会の誕生のためにはほんのわずかも自分も協力しようと決心した。」¹³⁾

「顧みれば」の主人公は1887年のボストンに生活する若者であり、彼が催眠術にかけられて眠り続けて2000年に目覚め、社会の変化に驚くという話である。2000年のボストンでは、市民はみな親切であり、差別はなく、市民は個人的な利益をあげることに興味はなく、全員が協力することにより多くの無駄が省かれた合理的な社会となっている。そのような社会について、ハワード自身は「協同の原則(co-operative principles)に基づいた社会である」¹⁴⁾と述べている。ハワードは、田園都市論形成にとつ

て重要な出来事の一つとしてベラミーの「顧みれば」を読んだことを挙げている¹⁵⁾ことから、「顧みれば」に出てくるような協同の原則に基づいた社会の誕生のための協力が、田園都市の建設であったと考えられる。

1898年にハワードは新都市建設の構想をまとめて'Tomorrow'として出版した。翌年の1899年には多くの賛同者のもとに田園都市協会が設立され、1903年にはロンドンの中心から約35マイル離れたハートフォードシャーにおいて、3,818

図-3 エベネザー・ハワードのダイアグラムNo 3
(出所：文献 31))

エーカーの土地が購入され、最初の田園都市レッチワースの建設が始まった。

3. ハワードの考えた田園都市

ハワードは1926年に、著書('Tomorrow')が書かれ、そして田園都市協会が設立されたいきさつについて講演しているが、その中で自分が都市計画(town planning)的な考え方をし始めるきっかけとなったものとして2つのことを挙げている。¹⁶⁾ 1つは、15歳のときに知ったスエズ運河とパナマ運河のことを挙げ、人間が様々な技術を用いて運河というものを建設することにより長く険しい航海とそれに伴う労苦が避けられることに強くひかれたと述べている。もう一つは21歳のときに、ロンドンのムーアゲート街を歩いたときのことを挙げ、そこの建物の所有者達が協力(co-operate)してファサードを描えればもっと街全体が調和した快適な空間になったはずであり、そういった協同の精神が人々に欠けていることが非常に残念に思われたと述べている。

これら2つを都市計画的な考え方をし始めるきっかけとして挙げていることと、ハワードがベラミーの小説に描かれた協同の原則に基づく社会を高く評価していることから、

- ・人間の技術力を用いることによって現状を改善したり労苦を取り除いていくということ
- ・人々が協力(co-operate)していくことで環境を良くしたり、無駄を省いていくという、協同の精神に基づいた社会を実現させること

以上の2点がハワードにとっては都市計画の本質的な要素であったと考えられる。

ハワードは'Tomorrow'出版以前に何度か田園都市建設に関する講演を行っている。その際に毎回聴衆に配付されたものに、「社会問題の解決を考える際に鍵となる考え方を示した」¹⁷⁾ マスターキーというダイアグラム(図-4)がある。このダイアグラムに付属した説明には、「それ(新都市)は、思慮深い人々によつ

すなわち、協同的な社会の実現と現存する社会問題の解決を目的として様々な技術を総合することにより、都市と農村の融合である田園都市が建設され、その結果様々な無駄が除かれる、ということであり、これらはハードにとつての都市計画の本質的な要素であると考えられる前記の2点と同義であるといえる。このことから、田園都市論においても、人間の技術力を用いることによって現状を改善したり労苦を取り除いていくこと、人々が協力

また 'The Transit Problem and the Working Man' という論文²³⁾において、ハワードは田園都市建設の利点の中でも、高家賃や高物価、汚れた空気、煙害、などが取り除かれることと、職場と住居の近接、農産物の産地と消費地の近接により長距離通勤や余分な物資の輸送などの無駄がなくなることを特に強調している。このことから、田園都市建設という行為により、様々な無駄や労苦が取り除かれるということを重要視していたといえる。

ハワードはオープンスペースに関して、その重要性からいくつかの形態（公園、庭園、レクリエーション地、アロットメントガー

デン、森、果樹園等)のオープンスペースの設置を提案し、また計画の最初の段階でオープンスペースを確保することも提案している。しかし、果樹園やアロットメントガーデン、森等の個々のオープンスペースに関して詳細な解説をしていないことや、著書以外ではオープンスペースに関してほとんど言及していないこと、ハワードは自分の計画は彼独自のものではなくそれまでにあった類似の計画を統合したものであるとして、特にJ.S.バッキンガムのモデル都市等を参照した³⁰⁾としていること、田園都市論以前にも健康的な環境をつくるためには広大なオープンスペースの確保が必要であるという考え方をしたものもあること等から、オープンスペースに関するハワードの考え方は、当時の一般的な考え方に影響を受けたものであり、ハワード自身が考え出したものではなかったと考えられる。

また著書以外では、オープンスペースに関することよりも、協同的な社会に関する記述や、様々な科学や技術を統合して田園都市を建設することにより多くの労苦や無駄を除くことができるという内容の記述の方が多いことから、ハワードはオープンスペースよりもむしろこれら2点に強い関心を抱いていたと考えられる。

5. まとめ

本研究から得られた知見を以下にまとめる。

- 1) ハワードにとっての田園都市、あるいは田園都市建設とは
 - a) 良心的な人々が様々な科学や技術を統合して新都市を建設することにより多くの人が労苦や様々な無駄から解放される
 - b) 新都市においては協同の原則に基づいた社会生活が営まれる
 という2点が主な中身であった。

2) 田園都市におけるオープンスペースに関してはオープンスペースの重要性は認識しており、いくつかの形態のオープンスペースの設置を提案し、また計画の始めの段階でオープンスペースを確保することを提案しているが、このようなオープンスペースに関する考え方は、ハワード以前の考え方の影響を受けたものであったと考えられ、ハワードの関心はむしろ上記の2点にあった。

謝辞：本研究を進めるにあたって、東京大学農学部緑地学研究室の井手久登教授、武内和彦助教に御教示を賜りました。また、株式会社長谷工総合研究所の特別な御配慮により貴重な資料を閲覧させて頂きました。さらに、イギリス・ハートフォードシャー・カウンティ・レコード・オフィスでも貴重な資料を閲覧させて頂くとともに御教示を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

- 1) ルイス・マンフォード (1946) : 田園都市理念と現代の計画 : 明日の田園都市 (エベネザー・ハワード) : 鹿島出版会 : 45
- 2) Ibid.
- 3) Howard, Ebenezer (1913) : How Far Have the Original Garden City Ideals Been Realised ? : The Garden City (C.B.Purdom) : London Press : 289
- 4) Howard, Ebenezer (1902) : Garden Cities of To-Morrow : Swan Sonnenschein : 130
- 5) Howard, Ebenezer : (Writings of Ebenezer Howard) : Hertfordshire County Archive : E/Ho : Folio 3
- 6) Howard, Ebenezer (1902) : Garden Cities of To-Morrow : Swan Sonnenschein : 135
- 7) Ibid. : 62
- 8) Howard, Ebenezer (1926) : (Paper on progress of his thought on planning, delivered at celebration of the birthday of Letchworth Garden City) : Hertfordshire County Archive : E/Ho : Folio 18
- 9) Macfadyen, Dugald (1933) : Sir Ebenezer Howard and The Town Planning Movement : Manchester University Press : 9
- 10) Howard, Ebenezer : Hertfordshire County Archive : E/Ho : Folio 18
- 11) Ibid.
- 12) Ibid.
- 13) Ibid.
- 14) Ibid.
- 15) Ibid.
- 16) Ibid.
- 17) Beevers, Robert (1985) : Garden City Utopia : Macmillan Press : 37
- 18) Ibid. : 39-41
- 19) Howard, Ebenezer (1902) : Garden Cities of To-Morrow : Swan Sonnenschein : 27
- 20) Howard, Ebenezer (1913) : How Far Have the Original Garden City Ideals Been Realised ? : The Garden City (C.B.Purdom) : London Press : 292
- 21) Ibid. : 292-293
- 22) Beevers, Robert (1985) : Garden City Utopia : Macmillan Press : 110-111
- 23) Howard, Ebenezer (1910) : The Transit Problem and the Working Man : The Planning Review Vol.III : 127-129
- 24) Howard, Ebenezer (1902) : Garden Cities of To-Morrow : Swan Sonnenschein : 130
- 25) Howard, Ebenezer : Hertfordshire County Archive : E/Ho : Folio 3
- 26) Beevers, Robert (1985) : Garden City Utopia : Macmillan Press : 97
- 27) Howard, Ebenezer : Hertfordshire County Archive : E/Ho : Folio 3
- 28) Pemberton, Robert (1854) : The Happy Colony : London Saunders and Otley : 82-83
- 29) Richardson, Benjamin Ward (1876) : Hygeia A City of Health : Macmillan and Co. : 19-20
- 30) Howard, Ebenezer (1902) : Garden Cities of To-Morrow : Swan Sonnenschein : 102
- 31) Howard, Ebenezer (1902) : Garden Cities of To-Morrow : Swan Sonnenschein
- 32) Beevers, Robert (1985) : Garden City Utopia : Macmillan Press : 41

Summary : Ebenezer Howard (1850-1928), who wrote 'Tomorrow : A Peaceful Path to Real Reform' in 1898, played an important role in development of town planning. He said that sufficient open spaces must be reserved at once the land was purchased. But in actually, he seems not to have reserved them. Viewing from progress of Howard's thoughts on planning, characteristic of the garden city theory which Howard himself conceived are summarized as follows. First, what he really wanted to realise was co-operative society. Second, he wanted to get rid of social evils, which many working men suffered from, by constructing a new city-garden city which was built by thoughtful persons in accord with a whole range of sciences.